

毎年、6月頃に日本基督教団では、新しく教会やキリスト教主義の関連学校などに赴任した牧師や教師のためのオリエンテーションが開かれるのです。その研修にわたしは農村伝道神学校から派遣されて2泊3日の研修のうち真ん中の日程に日帰り、出向きます。関西に二つ、関東に四つの計六つの神学校を卒業したひとたち、および独習しながらいくつもの科目ごとの試験を受けて3年以上かけて牧師になるひとなどが集まって研修を受けるわけです。

研修のプログラムの中に牧会夜話という時間がありまして、熟練の牧師がお話しをする時間があります。昨年は小林さんという方が担当しておられました。駆け出しの頃は器械体操をなさった経験から小学校で体操を指導するなどして教会の働きをなさったなどから、さまざまな働きの経験と想いを紹介してくださいました。

そのお話しの中で、戒めとして話された一つのことか未だ気にかかっています。話を聞いている大半は新任の牧師ですが、…だいたいこいつは趣旨です…」教会に赴任して教会員の方々と信頼関係を培うために、往々にしていっしょに食事をする機会を積極的に設けることをしがちであるが、それはいかなものかと思う、「とおっしゃるのです。つまり教会は飲食などをとおして親しくなる場ではなく、信仰をとおして信頼関係が築かれていく共同体であると言います。

この話の裏にあるメッセージは、飲み食いをおして教

会の中に馴れ合い関係が生じて、教会の成長が損なわれるようになるということです。その中でご自身の成功話も盛り込んでおられました。ある議員を務めていた教会員が、隠退後しばらく後に多額の賄賂を受け取ったことを悔い改める意志をもって話された、というような出来事など経験に基づくと説得力あるお話しをくださいました。しっかりと信仰に根ざした教会を建てられたのだなど感心することしきりでした。

しかしこの話を伺いながら、一方で尊敬の念を覚えつつ、他方で疑問も湧き起こってくるのでした。この二つの立場、飲み食いにより、なれ合いを寄せ付けない高邁な精神を維持するために、例えばかつてルーテル教会では牧師が5年で異動させられていたそうです。それが教会の衰退につながったということです。検察関係の人事も異動が多い、地元の人たちとなれ合い関係をつくらないためだと聞きました。が、公機関なので倒産ということはありませぬ。他方でお寺の住職などは世代を超えて一力所に居続けるという制度、飲み食いからはじまり何から何まで地域に根ざして信頼関係を築く…

いったいどちらが教会にとってお望ましいのでしょうか。この疑問は、福音書に根ざした疑問でもあるわけです。つまりイエスは絶えず人々と出会って食事なさっているのです。この二つの立場をそれぞれの立場に従って26〜27節を讀むならば、

1. 飲み食いを否定する読み方によれば

26はつきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。

…ただ腹一杯食えることができる、そんな動機から、わたしを捜すのはとんでもない、そんなエゴイストよりは、まだあの高慢なユダヤの指導者たちが、救い主のしるしとして奇跡を問題にしている方が、まだました。それでもなお、あなた方がいのちと食べ物の問題にするというのなら…

27朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。

2. 飲み食いを肯定する読み方

26はつきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。

…それでよい、ユダヤの指導者たちは病を癒やすなどあつと驚くような奇跡などを救い主ならばなさるはずだ、つまりしるしがあるかないかと騒ぎ立てているか、あなた方にとってはどうでもよいことなんだね、ただおなかいっぱい食べることができ、それがあなた方の救いであり、わたしに着いてくるのだね、そういう素直な心が大切なのだよ。ただし、あなた方は今の自分にとどまり続けるのではなく、信仰においてさらに成長して、27朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。

はじめの読み方は自己肯定的であり、後の方は自己否定的です。みなさんはどちらの読み方をなさるでしょうか？
— その上で「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」というイエスに連なるのです。

「働く」という言葉は、「土を耕す」、十戒の安息日で「6日の間（働く）、詩編において「義を行う」（15・2）」「と「悪を行う」（5・5）」などのように使われています。その働きは「永遠の命に至る食べ物」のために働きたいといエスは言われます。「朽ちる食べ物」が肉体の命を支える食べ物ならば、「永遠の命に至る食べ物」は、肉体・自己を超越する命という意味です。労働の意義は、そのような働きによつてはじめて完成するのです。

それは、なぜ十戒のうちで安息日の戒めがもっとも重要だと見なされたのかという根拠でもあります。そもそも「労働」とは、人間が自然界に働きかけることにより介入することであり、「休息」とは人間と自然との関わりが平和である状態を言つのです。そして、十戒の安息日規定以外の九つは神との関わり、人との関わりのあるべき姿、倫理観を定めています。人間がいつさい働きかけないことによつて、神が作られた世界が平和であることを表明する意味があります。（E・フロム）

六日の労働をとおして人間は、「朽ちる食べ物」を求め余り、平和の対極にある存在に導かれて、外界に働きかけることが多いのではなかったでしょうか。イエスはその働きが神の意志の完成に向かつてなされるよう群衆に呼びかけられました。

今日わたしたちは礼拝をこころに平和を覚える礼拝として集っています。日本という国に住んでいるわたしたちは、この日をよりの深くのちについて思いを巡らせる歴史を刻まれています。広島や長崎に起こった出来事は75年も

前のことですが、核兵器の脅威については、他の国々以上にその傷と痛みを感じつる環境に身を置いています。おそらく日本に住んでいる人あるいは世界中の大半は核兵器はいらぬと考えていると想像します。

調査は、核兵器不拡散条約（NPT）運用検討会議開催前の2010年1月から3月にかけて実施され、日本、韓国、フィリピン、ニュージーランド、米国、英国の青年4362人が回答した。核保有国で実施した調査結果の中には当惑するものもあった。例えば、米国では自国の政府が核兵器を保有していることを認識している回答者は僅か59・2％に止まった。また、英国でも自国が核保有国であることを理解している回答者は僅か43・2％であった。一方、勇気づけられる側面も明らかになった。「核兵器の存在が世界の平和と安定に寄与すると思うか否か」との質問に対して、核兵器保有国の青年を含む59・6％の回答者が「否」と回答した。また、67・3％が、「いかなる状況においても核兵器の使用は受け入れられない」と回答した。僅か17・5％が、「核兵器の配備を、国の存続が脅かされている状況下において最後の手段として認める」、6・1％が、「国際テロや大量虐殺を防止するためならば認める」と回答した。しかし、59・1％が、「核兵器が廃絶された方が安心できる」と回答した。

今わたしたちの世界には1万5千基近くの核弾頭があり、地球を破壊し尽くしてあまりあるほどの脅威を抱えています。わたしたちは具体的な働きとしてせいぜい核兵器廃絶の署名などをするこしかできませんが、もっと身近なと

ころで大切なことがあるといつことに気づく時、署名の文字に命が宿らせることができます。

それは身近な関わりに心を開くことによつて実践することができるといふ。直接に親族が被爆した方は、平和の脅威を観念ではなく、深く自らのこととして日常を過ごしておられます。また癌により放射線治療を受けた方には、免疫力が弱まるなどの二次的な症状により、瞬時に体が耐えることができなほどの放射線を浴びるといのが深く傷つくことについて、現実として想像することができます。放射線はまた遺伝や免疫系に著しく傷を及ぼすので、遺伝や免疫にかかわる病気を患っている方もまた犠牲となった方々により近く思いを寄せることができます。ただこのようないのちがひどく脅かされた経験を抱く方は往々にしてそのことを表に出さないで日々を過ごしておられます。

そついう方々と深い信頼に根ざした教会が育まれれば、わたしたちは「永遠の命に至る食べ物」のために働く教会へと成長することができるのではないのでしょうか？

